香取遺産

vol. 216

佐原諏訪神社と諏訪山の景観

佐原駅から南へ500mほど行くと、大きな鳥居と128段ある長い石段が姿を現します。

この石段の途中には、金比羅神社や稲荷社などといった境内末社が鎮座します。また天明3(1783)年、周りに竹が生えていないところに2本の竹が突然生えてきたことを瑞祥として歌が詠まれたいわれを誌した雙生竹碑や、郷土の俳人の句碑などが並びます。

これらの中を登った上に鎮座しているのが、佐原新宿鎮守、諏訪神社です。

社伝によれば、元は伊能村に鎮座していましたが、天正14(1586)年に佐原新宿の開発に際して、現在の諏訪山に奉遷されたと伝わります。

この諏訪山上からの眺望は、『下総名勝図絵』(香取遺産vol.211にて紹介)でも取り上げられており「此社景色最佳シ」とも述べられています。

また当社には、当時三大家にも数えられた国学者、小山田与清が文政3(1820)年、鹿島詣での途中、佐原に滞在した際に訪れています。その道中を記した「鹿島日記」に「こゝよりハ刀根川を打こし。板来。鹿嶋。など眼の中にこもりてみゆ」と諏訪神社からの見晴らしのよさについて述べています。

与清は、境内の雙生竹や、伐られようとしたところ一夜のうちに向きを変えた「かたよりの樅」、同じく一夜にして場所を動いた「すれあひの松」について「くすしき(神秘的な)ことどもなり」として、雙生竹の前にあった坊(僧の詰所)にて歌を詠んでいます。

なお、神社境内に坊があるのは、当時、別当寺として諏訪神社を荘厳寺が管理していたためと考えられます。

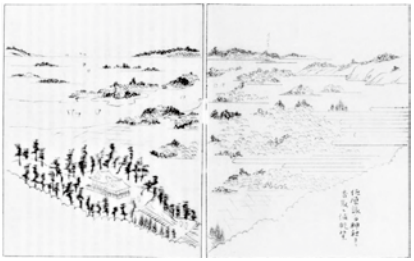
この佐原滞在の時の縁によるものか、与清は訪問の翌年に建てられた雙生竹碑の碑文を作っています。

佐原の歴史の中において、文化、景観の重要な一角を占める神社です。

問 生涯学習課 ☎(50)1224

雙生竹碑

諏訪神社鳥居・階段



佐原諏方神社ヨリ香取か浦眺望(川名登編『宮負定雄　下総名勝図絵』国書刊行会より転載)

諏訪神社拝殿